れない.

基礎理論の諸部会にあわせて，人口研究の視点からも関連・参考となる部会としては，従来の都市・農村，地域，老人問題，家族，教育等の実証研究が今年もひき続いた．今回特筆すべきは，中国についての部会がはじめて成立したこと，労働部会では出稼ぎ労働，階級・階層部会では職業移動が，またテーマ部会に「生と死の社会学」，「現代地域問題・地域紛争の位相」などが目新らしさとして注目されよう．

「人口の地方定住化」など他部会での人口発表もみのがせないが，人口部会としては以下の3本が発表された．(1) 日本大学松山博光「日本の自殺率特性と社会的要因」，(2) 日本大学黒田俊夫「日本人口の年齢構造転換と社会転換」(3)厚生省人口問題研究所阿藤誠・高橋重郷・小島宏・大谷憲司「日本人の出生行動と出生意識—第8次出産力調査の結果から」．討論は，人口研究と社会学との関連をめぐって活発に行われた．

（若林敬子記）

日本老年社会科学会第25回大会

日本老年社会科学会（会長：那須宗一中央大学教授）第25回大会（大会会長：塚本哲人東北大学教授）が昭和58年10月27日（木），28日（金）の両日，仙台市戦災復興記念会館において開催された．青葉通りの銀杏の大木の紅葉前線をめでながら森の都仙台の中秋のさわやかな気候の中で，多数の会員は，熱っぽい高齢化問題の討論を満喫されたようである．特に，第1日目午後のパネル・ディスカッション『地域と老人—住宅，施設，病院の連携による「地域老人福祉」の確立をめざして—』は，大会議場に超満員の会員の参加の下に，話題提供者，指定討論者，そして一般参加者の三つのグループの間で極めて活発な討論が展開された．本学会の圧巻であったといえよう．

老年社会科学会の理論的支柱の一つとして重大な役割をもっている人口部門においては，6人の演者による興味深い報告が行なわれた．決して多いとはいえないが，人口関係の報告も本学会ではかなり定着したように思われる．本研究所からは，清水浩昭による「「晩年型同居」をめぐって—高齢者の人口移動との関連で—」と，内野澄子「宮城県における人口移動の特徴—高齢者を中心として—」の2報告があった．鹿児島経済大学の染谷淑子による「鹿児島における老人問題の現状と今後の課題」の報告があり，また，日大人口研の黒田俊夫の「高齢化人口学再論」は熟成と清新に満ちた得意の高齢化論であった．さらに大間知千代グループによる「ハワイ日系移民の老後調査」についての二つの報告が行なわれた．

特筆すべきは，本大会で約60名の大量新入会員があったことである．高齢化社会を迎えるにあたって喜ばしいことである．その他，老人問題を中心とする心理，福祉，医療に関する多数の報告があったが，その詳細については大会プログラムと大会報告要旨集を参照されたい．

（内野澄子記）

（財）人口問題研究会創立50周年記念大会

財団法人人口問題研究会は，人口問題を恒久的に調査研究するために，昭和8年10月27日（内務省社会局の中に半官半民で）設立されたが，以来，本年はちょうど満50周年を迎えたことになる．それを記念した大会が，10月27（木）・28（金）の両日にわたって東京・赤坂の草月ホールで開催された．

第1日目には，元人口問題研究会理事長寺尾琢磨博士（慶応義塾大学名誉教授）の記念講演や「21世紀へ向けて—人間，家庭生活を中心として—」というテーマで，Hans W. Juergens（キール大学教授）と篠崎信男（人口問題研究会理事長）両氏の対談が行われるなど，盛りだくさんのプログラムの下，盛会裏に大会は終了した．